

カントにおける「叡知的な私の現実存在」について

香川, 豊
九州大学大学院 : 博士課程 : 西洋哲学史

<https://doi.org/10.15017/27491>

出版情報 : 哲学論文集. 9, pp.76-94, 1973-09-30. 九州大学哲学会
バージョン :
権利関係 :



カントにおける「叡知的な私の 現実存在」について

香 川 豊

序

カントは『純粹理性批判』において、「私は思惟する (Ich denke)」という統覚から「私は叡知体として現実
に存在する (Ich existiere als Intelligenz)」(B158)⁽¹⁾と語るが、一方で、私は「凡ての認識の論理的な形式」
(A117 Anm.)であり、「単純な表象としての私によつてはいささかの『感性的直観の』多様なものも与えら
れない」(B135)と考えている。然し、現実存在が語られる場合には既に直観との関係が存在しており、前者の
私は単なる認識の論理的な形式と見做し得ない様に思われる。又他方、現実存在の総合的述語付けは、経験の対象
(現象)についてのみ可能であると言われるが、然し叡知体としての私は現象とは見做されない。⁽⁵⁾ではその様な私
に如何なる意味で現実存在が述語付けられ得ると考えられていたのであろうか。この小論では、魂を唯物論の危機
から守るという合理的心理学の問題意識を媒介にして、この二つの問題を論じることにはしたい。

(注)

- (1)『純粹理性批判』については慣例に従い第一版をA、第二版をBと略してその原版の頁を示すことにする。

(2) カントの引用文における「」の内は筆者の挿入によるものである。以下、筆者による引用文中の挿入句は同様に示すことにする。

- (3) B422 — 423 Anm.
- (4) A601, B629.
- (5) A538, B566.
- (6) A383.

—

カントは『純粹理性批判』弁証論・誤謬推理の章において合理的心理学 (die rationale Seelenlehre) — 合理的心理学とは「私は思惟する」を「唯一のテキスト」(A383, B401)として、一切の経験から独立に思惟する存在体としての私 (Ich als ein denkend Wesen) の諸性質を推論しようとする学である。⁽¹⁾ — を問題にするが、その際「私は思惟する」という命題は「未限定な経験的直観、即ち知覚 (eine unbestimmte empirische Anschauung d.i. Wahrnehmung) を表現しており」(B422 Anm.) 「私は現実に存在する (Ich existiere)」という命題を自らの内に含む」(ibid.) 或いは両命題は「同一 (identisch)」(ibid.) であると主張する。

ところで他方、『純粹理性批判』においては「我々の凡ての現実存在 (Existenz) の意識は (それが知覚を通してであろうと、或いは或るものを知覚と結合する推論によってであろうと) あくまで経験の統一に属しており、

この野の外にある現実存在はなるほど端的に不可能と言えないけれども、その現実存在は我々が何によっても正当化し得ない一つの仮定である」(A601, B629)と言われる。然しそれにも拘らず、「私は思惟する」という単なる統覚から主張される私の現実存在に関して、カントは「私は叡知体として現実に存在する」(B158)と語っている。叡知体とは「感官の対象においてそれ自身現象ではない様なもの」(A538, B566)であり、経験の脈絡の内に組み込まれ得る感官の対象(現象)と見做され得ないのであるから、経験の野の外にあるものと考えられる。そうすると、現実存在に関して、現象についてののみ現実存在を主張しようとする見解と、現象ならざる叡知体としての私にそれを許そうとする見解とが語られていることになる。前者の見解は、我々の認識能力との関係で、現実存在の総合的述語付け(総合的認識)の可能な範囲を確定しようとする際に主張されたものであり、その場合、経験の野の外にある対象(従って又叡知体としての私)の現実存在の認識の可能性が排除される⁽²⁾。

ではこれに対し、後者の見解は如何なる意味と目的において主張されていたのであろうか。

「私は思惟する」が表現する未限定な知覚は、先きの場合「単に与えられた、しかも思惟一般に対して与えられたある實在的なもの (etwas Reales)」(B423 Anm.)を意味しており、その實在的なものは「思惟する存在体の如何なる作用 (Handlung) も内官の現象も唯物論的 (materialistisch) に説明され得ない」(Bd. V, S. 460⁽³⁾)ということを示すために語られる。即ち、「統覚は或る實在的なものであり、統覚の単純性はその可能性内に既に存している。ところが、空間の内には単純なものをなす様な實在的なものは何等存在しない。……従って、このことから単なる思惟する主観としての私の性質は唯物論の(主張する)根拠から説明することが不可能であるということが帰結する」(B419—420)と。思惟する主観(思惟する存在体)が単純で實在的なものであるという主張は、理性の「統制原理」(Bd. IV, S. 334)として使用される「理性概念」(A383)に過ぎないが、その際、「私は思惟する」に基づいて「我々は魂 (Seele) の性質に関して主観の判明な (klar) 意識に達すると同時

に、その現象が唯物論的に説明され得ないという確信に達する」(Bd. IV, S351)と考えられている。勿論この場合、「私は思惟する」から主観の判明な意識に達すると言われても、そのことは思惟する存在体が我々によって認識されるということを意味するものではない。何故なら、認識のためには直観と概念とが必要であるが、思惟する存在体の直観は我々の思惟には認められておらず、⁽⁵⁾「我々の」内的直観に関して言えば、我々自身の主観を現象としてのみ認識するのであって、この主観がそれ自身であるところのものに従って認識するのではない」(B156)からである。^{*}

*カントは『形而上学講義』において「根底にあつて、且つ内官の意識を表現する所の基体 (Substratum) は、単なる経験的心理学の概念である所の私という概念である」(Meta. S. 77)⁽⁶⁾と語った後、この私の実体性について次の様に主張する。「私は実体的なもの (Substantiale) を表現する。……これが実体 (Substanz) を直接直観し得る唯一の場合である。我々は「他の」如何なる物 (Dinge) についてもその基体と最初の主語を直観し得ない。然し、私の内には (in mir) 私は実体を直接直観する」(Meta. S. 78—79) と。「私は私自身を直接直観し、私を直接意識する」(Meta. S. 77) が、この場合の意識は「論弁的 (discursiv) ではなく直観的 (intuitiv)」(Meta. S. 80) であり、「対象の認識を持つために必然的な条件」(ibid.) をなす所の「客観的意識」(ibid.) 或いは「論理的意識 (conscientia logica)」(ibid.) と区別され、「主観的意識」(ibid.) 或いは「心理的意識 (conscientia psychologica)」(ibid.) と言われる。(右の私の内なる実体の直観という見解は前批判期に属する幾つかの『反省』においても見い出される。⁽⁷⁾ 右の『形而上学講義』の引用文中の実体 (実体的なもの) は批判期では思惟する存在体 (それ自身においてある主観) の実体を意味するものとして使用されており、その様な主観の直観が「純粹理性批判」において我々に許されていないことは先きに引用したところである。従つて、『形而上学講義』の私の内なる実体の内的直観という見解は批判期においてそのままの形では

支持され難いと言えよう。批判期ではそれ自身においてある主観の認識のために実践的な根拠が要求される。⁽⁹⁾ 即ち、「それ自身においてあるという性質に従つての自己自身の認識は、如何なる内的経験によつても獲得し得ないし、又人間についての自然知（Naturkunde）から生ずるものでもない。それはただもっぱら定言的義務の命法により、それ故ただ最高の実践理性によつてのみ人間に知られ得る自由の意識「から生ずるもの」なのである」（Bd. VII, S. 399）云。

では「私は思惟する」に基づいて主観の判明な意識に達するということが現象としての私の経験的認識を意味するかというと、そのことも亦否定されなければならない。何故なら、「私は思惟する」から直接主張される私の現実存在は「現象ではない」（B157）のであって、「私は私を思惟するものとして意識することによつて「従つて、単なる統覚、即ち「私は思惟する」によつて、「私自身を認識するのではなく、私が私自身の直観を思惟の機能に關して限定されたものとして意識する時に私は私自身を「経験的に」認識する」（B406）からである。「経験は知覚の客観をカテゴリーを通して、時間に関して限定すべきであるが、「私は思惟する」から主張される」現実存在はこの場合まだカテゴリー「の限定を受けたもの」ではない。カテゴリーは未限定に与えられた客観には關わらない」（B423 Anm.）のであって、その現実存在は「経験に先き立つ」（ibid.）のである。「私は思惟する」が表現する「未限定な知覚は……現象（Erscheinung）としてでもなく、事物自体（Sache an sich selbst）（本質体（Noumenon））としてでもなく、事実現実に存在し」（in der Tat existiert）「私は思惟する」という命題においてこの様なものとして示される或るものを意味する」（B423 Anm.）。確かに我々は「統覚の総合的根源的統一において……私自身を意識するが、私が自ら現象する様にでもなく、又私がそれ自身においてある様にでもなく、ただ「私は在る（Ich bin）」ということのみを意識する」（B157）のであって、斯の私の現実存在は現象或いは本質体の現実存在の認識ではなく、「凡ての私の判断と悟性作用に伴う「私は在る」という

表象の内に〔含まれた〕私の現実存在の知的意識」(BXL Anm.)を意味するに過ぎなかった。従って、この様な知的意識はあの経験の野から排除される叡知体としての私の現実存在の認識ではなく、又現象としての私の現実存在の認識でもなく、両者の中間に位置する様なものと考えられる。カントはこの様な現実存在の特殊性を示すためその知的意識を「現存在の感情 (Gefühl eines Dasein)」(Bd. IV, S. 334 Anm.)と呼んでおり、そのことによって対象についての一定の直観や概念からその知的意識を区別すると共に、その意識の非対象性と直接性を言い表わそうとしている。¹⁰⁾「私は思惟する」から主張される現実存在においては先きの第一の見解と異った問題意識が働いており、対象認識としての現実存在の総合的述語付けが問題にされているのではなかったのである。

ところで、我々が思惟する存在体の表象を得るのは「単に自己意識による」(A347, B405)のであり、「我々の意識の定式 (Formel) を持った我々自身を凡ての他の叡知的存在体のかわりに立てなければ我々は思惟する存在体を表象し得ない」(A354)のであるから、「私は在る」という自己意識の内に含まれた現存在の知的意識は、カントが「我々の魂の性質に関して主観の判明な意識に達すると同時にその現象が唯物論的に説明され得ないという確信に達する」と語る場合の拠り所をなしていると考えられる。ところが一方でカントは私の判明な意識に関して次の様に述べている。即ち「凡ての種々異った経験的意識が唯一の自己意識に結合せしめられていなければならないという総合的命題は我々の思惟一般の端的な第一にして総合的な原則である。然し、私という単なる表象があらゆる他の表象(その集合的統一を私という表象が可能にする)に関して先験的意識であるということは看過されてはならない。そもそもこの私という表象が判明 (klar) である (経験的意識) か不判明 (dunkel) であるかは此では問う所ではない。否その経験的意識の現実性 (Wirklichkeit) やえ何等问题ではないのである。むしろ、凡ての認識の論理的な形式の可能性は必然的に能力としてのこの統覚への関係に基づく」(A117 Anm.)と。しかもこの私という表象は「単純な、それだけでは内容においてまったく空虚な表象」(A345, B404)であ

り、「単純な表象としての私によつてはいささかの〔感性的直観の〕多様なものも与えられない」（B135）と言われる。然し、カントは先きに「主観の判明な意識」を語り、「私は思惟する」が未限定な経験的直観を表現する」と主張したのであった。

ではこの私に関する一見相反する叙述を如何に解釈したらよいのであろうか。

（注）

- (1) A 342, B 400 f.
- (2) このことについては拙稿「カントにおける「関係的定立」としての可能性と現存在」・哲学論文集第八輯、五十頁以下を参照されたい。
- (3) Bd. V 中 Kants Gesammelte Schriften Akademie Ausgabe の第五巻を示す。以下アカデミー版からの引用は同様にして示すことにする。
- (4) A 51, B 75—76.
- (5) B 138 —139 ; B 135 .
- (6) Meta. 中 中 “Immanuel Kants Vorlesungen über die Metaphysik” の略称であり、引用はシュニット版（“Immanuel kants Vorlesungen über die Metaphysik , Zweite Auflage”, nach der Ausgabe von 1821, neu herausgaben von Dr. K. Schmidt）に準ずる。
- (7) Refiktionen , Nr. 4234; Nr. 4718; Nr. 5295 (Bd. XV Ⅲ , S. 470 —471 ; S. 685 —686 ; Bd. XV Ⅲ , S. 145 —146)
- (8) Vgl . Bd . IV, S . 334 .
- (9) B 430 —431 ; Bd . V , S. 133 .

(10) Vgl. H. Heimsoeth: *Personlichkeitsbewusstsein und Ding an sich in der kantischen Philosophie*, Kantstudien Egavungshäfte 71, (以下)を Personl. u. D. a. s. と略す) S. 244.

此で語られる感情は思惟の自発性との関係で語られているのであるから単に感性に属する様な感情ではないと考えられる。カントは『人倫の形而上学の基礎付け』や『実践理性批判』において自発的で知性的な尊敬、(Achtung)の感情を語っているが(Bd. IV, S. 401 Anm.; Bd. V, S. 73)「恐らくこうした自発的で知性的な種類の感情に属するものであろう」。

二

認識の論理的形式としての私は、知覚がそれへと関係付けられる関係点(或いは統一)と考えられており、その可能性は能力としての統覚に關係する所に存すると言われた。能力としての統覚とは悟性、即ち統覚の綜合統一の働きであるが、⁽¹⁾知覚の私への關係付けをア・プリオリに可能にする悟性の働きに注目する限りにおいて、私という統覚の同一性がア・プリオリに思惟され得るのである。⁽²⁾カントは実際にこうした私という形式を伴わない知覚の存在を認めており、⁽³⁾認識の論理的形式としての私は、あくまで知覚をそれへと關係付ける統覚の綜合統一の意識に基づいて、一定の思惟に先き立つものとして論理的に表象されるに過ぎない主観である。この様な主観は「ア・プリオリな表象としての論理的な私」(Bd. XX, S. 270)と言われ、表象が意識される限りで⁽⁴⁾「我々の凡ての表象の相関者(Korrelatum)をなしており」(A123)「思惟において表象を、私の表象(meine Vorstellung)と見做し得るために凡ての表象に伴い得なければならない論理的形式的主観と⁽⁵⁾考えられている。しかもこうした主観は「普遍的な自己意識」(B132)としては人格的な個性を離れており、⁽⁷⁾判断における表象の客観的統一⁽⁶⁾点として「意

識一般」(Bd, IV, S. 300 ; B143)と言われ、我でも、汝でも、彼でもあり得る様な超個的な認識論的主観を意味すると言えよう。⁽⁸⁾

ところでこうした意識は再認の綜合の条件と考えられているが、再認の綜合においては「再生的表象とこの表象を与えた現象との同一性」(A115)が経験的に意識されるのであり、認識の現場では私という表象は経験的に意識されない。⁽⁹⁾客観的な知覚としての経験的意識の存在の条件である私という表象は、カントにおいてあくまで論理的形式的なものであり、その現実性は私という表象の認識に対する権利要求にとつて必然的なものと見做され得るのである。カントはこの意味で認識の論理的な形式としての私の経験的意識が問題にならないと語ったと考えられる。勿論こうした私が直観という質料的なものを含み得ないことは、このような主観が認識の形式的条件として経験に論理的に先き立つと考えられていることから明らかである。^{*}

* カントは『純粹理性批判』の誤謬推理の章において「私は思惟する」を「凡ての概念一般の運搬具 (Vehikel)」(A341, B399)と考えている。然し、単に運搬具という様な形式的な性格付けにおいては、私という表象は客観的な言表を含む思想(認識)に関わるのみでなく、凡ての思想に関わり得ることになる。思想であれば如何なる思想にでも関わり得る私は「私の思想とその連関の単なる形式的条件」(A363)であり、そこでは対象との関係が一切捨象された「単なる自己意識との関係において成り立つ思惟」(B411 Anm.)が問題にされる。そうして、その場合の私は「単に思惟する働き及び意識の統一に関する主語」(B411)として取り扱われる。

然し、認識の論理的な形式としての私は常に対象と関係する思惟において問題にされており、それは認識の客観性の一つの条件である。⁽¹⁰⁾統覚の統一性(私)は「我々がそれを経験の可能性のために使用せざるを得ないということによってのみ我々自身に知られる」(B420)ものであるが、カントはこれを同時に「私がそのもとにおいて一般に思惟する条件」(A346, B405)‘即ち「私の主観の性質 (Beschaffenheit)」(ibid.)と考えて

いる。こうした、主観的側面を対象との関係を捨象した思惟において問題にする時、我々は単なる思想の形式的条件としての私という概念を獲得するのであるが、この場合の私も亦論理的形式的主観と考えることが出来る。然し、この私は認識の論理的な形式としての私とその考察の場面を異にしており、先きの論理的形式的な主観の内に含めて考えなかった。

では「私は思惟する」という命題は如何なる意味で未限定な経験的直観を表現していると考えられたのであろうか。カントは私の現存在と統覚との関係を以下の様に語る。即ち、「私は思惟する」は私の現存在を限定する働き（Aktus）を表現している。従って、現存在はこの表現によつて既に与えられているが、然しこの現存在を如何に限定すべきか、即ち現存在に属する多様を私の内において如何に定立すべきかの仕方はこの表現によつてはまだ与えられていない。これが与えられるためにはア・プリオリに与えられた形式、即ち感性的であり、且つ限定可能なものの受容性に属する所の時間を根底に持つ自己直観が必要である」（B157 Anm.）と。現存在を限定するとは知覚を経験にもたらすことであるが、経験が成立するためには知覚を通して与えられた経験的直観の多様が一つの意識において結合されなければならないと考えられている。「何故なら、与えられただけの表象は、「私は思惟する」という統覚の働きを共有せず、従って、一つの自己意識に統合されないから、意識において結合されることがなければ何ものも直観の多様な表象によつては考えられも、認識されもされないからである」（B137）。経験が成立するために経験的直観の多様に付け加わらねばならない統覚の働き（統覚の綜合統一¹²）とは、経験判断における表象の客観的統一（経験的真理）の根拠であり、経験の可能性の条件と考えられるが、この統覚の綜合統一は、「悟性そのもの」（B134 Anm.）であり、悟性は構想力を媒介として内官を触発し、¹³「感性的直観の多様の結合を産み出す」（B155）、即ち現存在を限定する。それ故、先きに「私は思惟する」は現存在を限定する働きを表現

すると言われたのである。¹⁰我々は自己の内的経験においても常にこの働きを前提しなければならないのであって、¹¹「自己自身の意識(統覚)はそれによって一般に自己を客観たらしめるという働き」(Bd. XXII, S. 413)でありこの様な働きは客観として立てられるもの、即ち経験的直観の多様との関係を既にその内に含んでいると言えよう。「私は思惟する」はその働きの「(経験的)使用の条件」(B423 Anm.)として経験的直観を質料的契機として要求しており、¹²「まさに一般的に経験的な所与性における動機や、内的結合がなければ純粹自己意識も存しない」のである。¹³そうして、先きに「私は思惟する」という命題が未限定な経験的直観を表現すると言われたことは以上の様な統覚と経験的直観との関係を意味していたと考えられる。

ところで、「私は思惟する」が現存在を限定する働きを表現しており、その働きの使用の条件として既に経験的直観との関係を含むとして、そのことが何故観知体としての私の現実存在の説明になり得ると考えられたのであるうか。

カントは合理的心理学の根底に存する「私は思惟する」について次の様に語る。「私は自分自身の知覚を表現するこの(「私は思惟する」という)命題において或る内的経験を持ち、従ってその命題の上に立てられる合理的心理学が決して純粹でなく部分的に経験的原理に基づいているということを我々は難点と考える必要はない。蓋し、この内的知覚は「私は思惟する」という単なる統覚以上のものではないからである」(A342—343, B400—401)。そうして、この統覚は経験の可能性の研究に属するものとして「先験的」(A343, B401)であると。勿論、内的知覚と言っても、それは経験的統覚(内官)の様な直観表象に関わる知覚を意味しているのではなく、あくまで経験の可能性の条件たる統覚としての知覚が考えられているのであるが、こうした内的知覚は、表象を対象へ関係付ける場面での認識の形式的条件としての統覚の権利要求に関わるものではなく、その関係付けの内で働いている思惟の自発性の作用の意識の事実存在に関係している。この場合には意識は自己に立ち帰っており、自己に

向けられた意識において統覚の働きの現実的、知的意識が可能と考えられているのである。「私は思惟する（— cogito）」（私は思惟しつつ在る（sum cogitans））は現実性（Wirklichkeit）を直接言ふ表わしつつ在る」（A355）と言われるが、このことは統覚の働きの現実的意識に即して「私は在る」、即ち私の現存在の知的意識が成立することを示しており、「私は在る」が語られる統覚においては、思惟の一切の行為の地平を形成する様な「凡ての結合の源泉」（B154）としての統覚が考えられているのであって、単なる知覚の統一点としての統覚が考えられているのではなかったのである。統覚の働きの意識は勿論直観表象に関わる知覚を媒介として、又その限りにおいてのみ我々に現実的になるに過ぎないが、こうした意識においては思惟、即ち現存在の限定作用の自発性が表象され、その際「その自発性を私が意識しているに過ぎないところの私の内なる限定するもの（das Bestimmende in mir）」（B158 Anm.）、「即ち思惟する主観が直接且判明に意識される。そうして、この自発性故に思惟する私は「観知体」（ibid.）と呼ばれたのであった。」

ところで、統覚の綜合統一は経験を可能にする働きとして既に経験に於ける現存在の限定作用を表現しており、その働きの現実的意識は経験的なものを媒介として生ずるものと考えられていた。それ故、カントは統覚の綜合統一の働きの意識において観知体としての私の現存在も同時に主張し得ると考えたのである。そのことは「私は在る」という自己意識に基づいて、「主観の判明な意識に達すると同時にその現象が唯物論的に説明され得ないという確信に達する」と考えていることから窺われるが、然し、このことが主張されるためには思惟する主観（観知体としての私）と内的現象（感性的な私）との同一性が前提されていなければならない。しかも、自己意識から直接私の現実存在が語られるのであるから、自己意識から直接この同一性も語り得なければならないであろう。ではこの同一性は自己意識において如何なる理由から主張されるのであろうか。

(注)

- (1) A127 ; B134 Anm. ; Vgl. H. Cohen : Kants Theorie der Erfahrung, Neudruck der 4 Auflage , Berlin 1925, S. 293 —294 .
- (2) A108 ; Vgl. B134 —135 .
- (3) 例えは経験にならない知覚判断の存在がこれに當る (Vgl. Bd. IV. S. 299 v. Anm.) 。
- (4) 勿論、私は認識の論理的な形式であるから客観的な知覚 (認識) という意味で表象が意識される限りでの凡ての表象の相關者である。

- (5) B131.
- (6) Bd. VII, S. 141 ; Reflexionen zur Anthropologie , Nr. 244 (Bd. XV, S. 85)
- (7) Vgl. H. Cohen ; a.a.O. S. 300.
- (8) Vgl. A346 , B404 ; H. Heimsoeth ; Personl. u. D. a. S. S. 235 .
- (9) Vgl. Meta. , S. 79—80.
- (10) A105 .
- (11) B132 f.
- (12) B141 —142 .
- (13) B153 —154 .

(14) 現存在を限定する働きを表現すると言ってもこの場合、統覚が「単に時間における私の表象に関する私の現存在の限定可能性 (Bestimmbarkeit) 」 (B420) を表現するという意味であり、対象の可能性の思惟において既に経験的なものが与えられていなければならないと考えられている (Vgl. A581 , B609) 。

- (15) Reflexionen, Nr. 6311 (Bd. XVIII, S. 610—611)
- (16) Vgl. B. 1.
- (17) H. Heimsoeth: Personl. u. D. a. D. a. S., S. 244.
- (18) B. 154; Bd. VII, S. 134 Anm.
- (19) Vgl. Heimsoeth: Transzendente Dialektik; Erster Teil: 1966 (以下 Transz. D. と略す) S. 85.
- (20) 統覚の綜合統一としての「私は思惟する」は「私が、諸表象の感性的に与えられた多様性を、諸々の純粹悟性概念、即ち諸カテゴリーの限界付けられた多様の内へと自らを分節する統覚の統一の予視 (Vorblick) から結合するもの」(M. Heidegger; Kants These über das Sein, 1962, S. 290 (但し引用は Wegmarken, 1967 の頁によった))を意味しており、我々はこの様な綜合統一において自己自身の現存在を意識するのである (Vgl. B. 157)。これに対し、知覚の統一点としての私、或いは「私は思惟する」は「統覚の形式」(A 345)と言われ、それは「凡ての概念に伴う単なる意識」(A 346, B 404)を意味するに過ぎず、決して現存在を限定する作用を表現するものではなかったのである。従って又この意味での「私は思惟する」から私の現実存在を主張することは出来ないと言えよう。
- (21) Vgl. Bd. IV, S. 451; Reflexionen, Nr. 4182 (Bd. XVII, S. 447)
- 観知体としての私について次の様に語られる箇所がある。即ち、「全自然をもっぱら感官によって知る所の人間は、又単に統覚によって、しかも全く感官の印象に数え入れられることが出来ない所の作用 (Handlungen) や内的規定において自己自身を認識する (erkennt sich selbst)。従って、人間は自ら勿論一面では現象体 (Phänomen) であるが、他面においては或る種の認識能力に関して一つの単なる観知的対象 (ein bloß

intelligibler Gegenstand) である。何故なら、この叡知体の作用はまったく感性の受容性に数え入れられないからである。我々はこの能力を悟性及び理性と名付ける」(A566—547, B574—575)と。勿論、此で語られる自己認識を客観的な対象認識と解する限りこの箇所は「純粹理性批判」の他の叙述と矛盾した表現をなしていると言わねばならない。然し、この統覚による自己認識は先験的自由の問題に際して語られており、その自己認識の意味は先験的自由と実践的自由の關係の解明を前提として確定されるべき問題なので別の機会に論じたい。

三

カントは「思惟する存在体としての私は勿論感官的存在体としての私と同一主観である」(Bd. VII, S142) 或いは「私は在る」という命題に於ける私は単に(時間における)内的直観の対象であるばかりでなく、意識の主観である」(Bd. IV, S. 337)と語る。確かに「私が私自身を意識していることは既に二重の私、即ち主観としての私と客観としての私を含んだ思想である」(Bd. XX, S. 270)。然し、この二重の私が区別されながら同一であると如何にして主張し得るのであるうか。カントもこの難問を意識しており、⁽¹⁾それに対し、「私は思惟する」という私が私自身に対して(直観の)対象であり、私を私自身から区別することが出来るということが如何にして可能であるかは疑うことの出来ない事実(ein unbezweifeltes Faktum)であるが、それを説明することは絶対に不可能である」(ibid.)と答えている。即ち、私自身が内官を触発し、私自身を現象として認識するという事実を以て難問に答えるのである。⁽²⁾内的触発とは悟性による内官の触発であり、その作用は「悟性の最初の〔感性への〕適用」(B152)として「構想力の先験的綜合作用」(B152)の名を以て呼ばれる。この綜合作用は常に

統覚の統一を目指しており、統覚の統一を目指して結合することこそ統覚の綜合統一の働きであった。統覚が現存在を限定するとは私自身を客観（経験の対象）として立てることを意味しており、この定立作用の意識が現実的であり得ることは先きに述べた所である。自己を客観として立てる作用の意識は自律（Autonomie）の意識⁴⁾であり、その場合の客観は「私の同一的自己の限定（Bestimmungen meines identischen Selbst）」（A129）と言われるが、内的触発は「感性的な私が知覚を意識の内に取り入れるために知性的な私によって限定される」（Bd. X, S. 270）ことを意味しており、「悟性の内官に対する綜合的影響」（B154）としての構想力の先験的作用は、感性的な私の知性的な私による限定作用、換言すれば同一的自己の自己限定作用として意識されると考えられる。従って、その作用の現実的意識においては二重の私の区別とその同一性が事実として露になっていると言える。そうしてこの様な事実が認められる以上、統覚の現存在の限定作用の現実的意識から直接観知体としての私の現実存在が語られ得ることになる。⁵⁾

ではこうした自己意識の事実において如何なる主観が考えられていたのであろうか。カントはその事実から次の様に語っている。即ち、「〔自己意識の〕事実は何れの感性的直観を遥に超えた崇高な能力を示しており、その能力は悟性を凡ての動物からまったく切り離す可能性の根拠として、動物に対し、動物自身が私と称する能力を我々が与える原因を持たなくなる。そうして自己の作った表象と概念の無限性を望見する。然し、これによって二重の人格性が意味されるのではなく、私は思惟し直観するという私のみが人格（Person）であり、私によって直観される客観としての私は私の外なる他の対象と同じく事物（Sache）である」（Bd. XX, S. 270）と。

ところで、私の現存在を含む「私は思惟する」という命題は「経験的なものを媒介として生ずる統覚の作用の現実的意識に基づく故に「経験的命題」（B422 Anm. ; B420）と言われるが、この経験的命題としての「私は思惟する」は、「私は思惟しつつ現実に存在する（Ich existiere denkend）」と同義であり、⁶⁾「この命題の内には既に

単なる思惟の自発性のみならず、直観の受容性も亦存在している。」(B429—430)と言われる。従って、この経験的命題においては思惟しつつ直観する人格としての私が考えられていると言えよう。人格とは「異った時間における自己自身の数的同一性を意識しているもの」(A361)であるが、この命題は「私がそこで私を意識している全時間において、この時間を私の自己の統一性(Einheit meines Selbst)に属するものとして意識している」(A362)ということを意味しており、「それはこの全時間が個体的統一としての私において(in mir als individualeller Einheit)あるというougが、或いは、私はこれ等凡ての時間において数的同一性を以って見い出されるところが同じことである。従って、人格の同一性は私自身の意識の内に(in meinem eigenen Bewußtsein)不可避免的に見い出される」(ibid.)と言われる⁷⁾。しかも、「人間の自我(Ich)は勿論形式(Form)(表象の仕方(Vorstellungsart))に関して二重であるが、然し、実質(Materie)(内容(Inhalt))に関しては二重ではなく」(Bd. VII, S. 134 Anm.)という理由から、人間の魂について人格の同一性が主張される。ところで、魂(思惟する存在体)の表象は自己意識によつてのみ可能であるから、経験的命題としての「私は思惟する」においては実質の同一性が主張される個体的主観が語られていたと言うことが出来よう。統覚の作用の現実的意識に即して成立する私の現存在の知的意識においては、現に思惟しつつ自己に立ち帰り得る様な存在者が考えられていたのである⁸⁾。もっとも、統覚の綜合統一の働きは経験の可能性の条件であり、その働きの現実的意識によつてその先験性が破壊されるものではない。統覚の働きはその現実的意識によつて現に思惟しつつ自己に立ち帰り得る様な存在者の先験的作用として顕在化されるのであり、この純粹作用が我々の内面性において或る實在的な自発性の作用として意識されるのである。ところで、先きに述べた様にこの作用の意識において叡知的な私は「私の内なる限定するもの」として意識されるのであった。しかもその私への現実存在の述語付けは統覚の働きの現実的意識に基づいているのであるから、「限定するもの」は「私の内なる」という規定を伴った形で意識されており、叡知的な私は

単に超個的な論理的形式的主観ではなく、全時間がそれに属する様な「私の自己の統一性」を意味していたと言える。

我々は叡知体としての私の現実存在の主張を、カントの「私は思惟する」に関する叙述を通して、しかも合理的心理学の問題意識を媒介として考えて来た。然し、この主張は魂を唯物論の危機から守るということのためにのみ語られたものではなく、又この主張を明らかにする上で言及さるべき問題は、此で述べられた問題に尽きるものでもない。然し、他の言及さるべき問題に関しては稿をあらためて考えることにしたい。

(注)

- (1) B155.
- (2) Vgl. B155 f.
- (3) A119.
- (4) Vgl. E. Adickes ; Kants Opus postumum , Kantstudien Ergänzungshefte X , Berlin , 1920. S. 641 .
- (5) 「私は思惟する」が現存在を限定する働きを表現するということは、その働きの現実的意識において事実として露になっているのであるから、自己意識の事実から叡知的な私の現実存在が帰結するとも考えられる。
Vgl . F . Grayeff ; Deutung der theoretischen Philosophie Kants , 1966, S. 181 .
- (6) B429
- (7) この場合の人格が実践的な意味で語られているのではないことは、それが悟性能力との関係で語られていることから明らかである。(Vgl. Bd.VII, S. 127)。又この場合の人格の同一性は実体としての思惟する主観の数的同一性の認識ではなく (Vgl. A363 ; B408)、魂 (思惟する存在体) についてその様な知 (Wissen)

を持ち得るというに過ぎない。(Vgl. A360 — 361 ; Bd. V 11, S. 298)。そうしてこの知の獲得の基盤として自己意識に基づく思惟する主観の判明な意識が語られたのである。

(8) Vgl. H. Heimsoeth; Trans. D. S. 113 — 114 Anm. 159

又『純粹理性批判』の以下の各叙述においてはその様な存在者としての主観が考えられていたと言うことが出来る。——「凡てのこれ等の現象、従つて我々の関与し得る凡ての対象は総じて私の内に (in mir) 在る。即ち、私の同一的自己の限定 (Bestimmungen meines identischen Selbst) である」(A129)。

「我々においては (in uns) 感性的直観の或る形式がア・プリオリに根底に存しているので自発性としての悟性は与えられた表象の多様を通して内官を統覚の綜合統一にかなつて限定することが出来る」(B150)。

「悟性は従つて、構想力の先験的綜合の名のもとに、自己がその能力をなしている所の受動的主観に (aufs passive Subjekt, dessen Vermögen er ist) 及ぼす作用は、我々が正当にも内官がそれによって触発されるという様な作用である」(B153 — 154)。

(付記)

‘Ich existiere’には「私は実際に存在する」、「私は実存する」、「私は在る」等の訳語が付されているが、‘Ich existiere’は自己意識の現実性を言い表わすものと考えられるので、必ずしも満足のいくものではないが、そのことを示すため「私は現実存在する」と訳しておいた。

(本学大学院博士課程・西洋哲学史)